

# 平成12年度病虫害発生予報 第3号（6月予報）

平成12年5月31日  
津軽地域病虫害防除所  
南部地域病虫害防除所

## 【概要】

水稲では、イネドロオイムシが全県的、イネカラバエが東青・西北五地域でやや多いと予想される。  
りんごでは、モニリア病（実腐れ）、黒星病、斑点落葉病がやや多いと予想される。  
りんご以外の落葉果樹では、おうとうの灰星病（実腐れ）が多いと予想される。  
畑作・野菜では、小麦の赤かび病が全県的、赤さび病が津軽地域、にんにくの春腐病が全県的、さび病が津軽地域でやや多いと予想される。

### 《発生が多くなると予想される病虫害》

おうとう	灰星病（実腐れ）
------	----------

### 《発生がやや多くなると予想される病虫害》

水 稲	イネドロオイムシ イネカラバエ（東青・西北五地域）
り ん ご	モニリア病（実腐れ） 黒星病 斑点落葉病
小 麦	赤かび病 赤さび病（津軽地域）
にんにく	春腐病 さび病（津軽地域）

### 病虫害に関する問い合わせ先

	電 話	F A X	E-mail
津軽地域病虫害防除所	0172(52)9500	0172(53)3717	ts-bojo@ags.pref.aomori.jp
南部地域病虫害防除所	0176(23)4290	0176(20)1167	na-bojo@ags.pref.aomori.jp

# 1 水 稲

病 害 虫 名	予 察 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
イネミズゾウムシ	津軽地域	(成虫侵入 最盛期) 平 年 並	やや少ない	水田への侵入始めが遅い。 6月の気温が高い見込みである。 前年の発生が津軽地域では一部で発生程度の高いほ場があったものの発生面積は平年より少なく、南部地域では平年並であった。
	南部地域		平 年 並	
イネドロオイムシ	県内全域	(ふ化最盛期) 平 年 並	やや多い	成虫の初発が遅い。 6月の気温が高い見込みである。 前年の発生量が平年よりやや多く、越冬成虫数もやや多いと考えられる。
イネカラバエ	東青・西北五地域	(産卵最盛期) 平 年 並	やや多い	4・5月の気温が低く経過している。 6月の気温が高い見込みである。 前年の発生量が東青・西北五地域では平年よりやや多く、その他の地域では平年並であった。
	上記以外の地域		平 年 並	

## (1) 防除のポイント

《 6月の防除作業 》

1 半旬	2 半旬	3 半旬	4 半旬	5 半旬	6 半旬
------	------	------	------	------	------

イネミズゾウムシ  
(イネドロオイムシ)  
【 水面施用 】

イネドロオイムシ  
【 茎葉散布 】  
【 水面施用 】

イネカラバエ  
【 茎葉散布 】  
【 水面施用 】

イネヒメハモグリバエ  
【 茎葉散布 】  
【 水面施用 】

葉いもち  
【 水面施用 】

注: — は防除時期  
( ) 内は同時防除できる害虫  
【 】内は防除方法

## 【 葉いもち 】

最近、初発時期が早くなっており、前々年は6月22日に初発が確認されているので、発生に注意する。

抵抗性の弱い品種(ゆめあかりなど)や常発地、軟弱な生育をしている場合などは初発の前から予防散布を行う。水面施用は6月末までにオリゼメート粒剤を3kg/10a散布、またはオリゼメートパックを20パック/10a投げ入れるか、初発の10日前～初発時にオリブライト1キロ粒剤を1kg/10a散布する。いずれも湛水状態で散布し、4～5日間水を流さない。

補植用の取置苗は放置すると、葉いもちの発生源になる可能性があるので、補植作業が終わり次第、土中に埋めるなどして処分する。

## 【 イネミズゾウムシ 】

田植時に防除をしなかった水田では、6月上旬に越冬成虫の発生状況を調査し、食害株率が8割を越えた場合には、県農作物病虫害防除基準に準じて防除する。

越冬成虫の発生状況は、畦畔から水田内に2～3m入って、中央に向かって連続25株2か所、合計50株程度について、成虫による食害がみられる株数を調査して食害株率を算出して判断する。

なお、この時期の防除はイネドロオイムシも同時防除できる。

## 【 イネドロオイムシ 】

発生はやや多いと予想されるので、ふ化最盛期（本田被害発生初期：6月4～5半旬）に県農作物病害虫防除基準に準じて適期防除に努める。

低温や曇天の日が続くと産卵期間が長引き、防除時期を逸しやすく、また、幼虫の食害活動にも好適となるため、被害が大きくなることがあるので注意する。

田植え時に防除したほ場や5月下旬～6月上旬にイネミズゾウムシを対象とした防除を実施したほ場では、本虫の防除は不要であるが、発生が遅れ6月下旬に卵塊や幼虫が多くなるような場合は追加防除が必要となることもあるので、発生状況に注意する。

P H C（サンサイド）剤、P M P（アッパ）剤抵抗性の発現が認められる地域もあるので、防除効果が低下していると思われる場合には防除剤を替える。

## 【 イネカラバエ 】

防除は、産卵最盛期にP M P粉剤3 DLを10 a 当たり3～4 kg茎葉散布するか、産卵最盛期からその10日後までにジメトエート粒剤を10 a 当たり2 kg水面施用する。

前年の傷穂の発生が多かったほ場では、ジメトエート粒剤の水面施用により防除する。

茎葉散布による防除では、防除適期である産卵最盛期を逸すると効果が半減するので適期防除に努める。

産卵最盛期を知るためには、産卵状況を実際に調査するのが望ましい。

- ・ 産卵株率が100%となる地域では、産卵株率が80%に達したら産卵最盛期とみなしても良い。
- ・ 傷穂率6%以下の地域では、水稻への初産卵日に7～10日を加えた日、傷穂率6%以上の地域では10～13日を加えた日を産卵最盛期とみなしても良い。
- ・ 例年の地帯別産卵最盛期の目安は下表のとおりである。

地 帯	産卵最盛期
平野地帯	6月末～7月始め
山間・海岸地帯	7月上旬末
下北地域	7月上旬末～中旬始め

越冬幼虫の育つスズメノテッポウ、ヌカボなどの雑草を刈る。

## 2 りんご

病 害 虫 名	予 察 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
モニリア病 実腐れ	県内全域		やや多い	5月の葉腐れ発生量がやや多かった。
黒星病	県内全域		やや多い	5月は全般的に感染に好適な日が多く、発生量がやや多かった。 6月の降水量が多い見込みである。
斑点落葉病	県内全域	平年並	やや多い	前年秋の発生量が多く、越冬量が多かった。 6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。
リンゴコカクモン ハマキ	県内全域	やや遅い	少 ない	4～5月の気温が低めに経過し、幼虫の発育がやや遅れている。 越冬世代の5月の発生量は少なかった。
リンゴモンハマキ	南部地域	平年並	少 ない	4～5月の気温が低めに経過した。 6月の気温が高い見込みである。 越冬世代の発生量が少なかった。
キンモンホソガ	津軽地域	平年並	少 ない	4～5月の気温が低めに経過した。 6月の気温が高い見込みである。 前年秋の発生量は少なく、越冬量は少ない。
	南部地域	平年並	平 年 並	4～5月の気温が低めに経過した。 6月の気温が高い見込みである。 前年秋の発生量は平年並であった。

病 害 虫 名	予 察 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
クワコナカイガラムシ	津軽地域	平年並	平年並 (一部地域で多い)	越冬世代の移動初日は平年並である。 越冬卵量は平年並であるが、一部で多かった。

その他の病害虫  
黒点病、モモシンクイガは平年並に少ない見込みである。

## ( 1 ) 防除のポイント

### 【 腐らん病 】

見落としによる枝腐らん、胴腐らんが目立っている。胴腐らんは病患部を削り取り塗布剤を塗るか、泥巻きを行う。枝腐らんは被害枝を切り取り処分する。

トップジンM水和剤1,500倍及びベンレート水和剤3,000倍は、摘果後の果柄感染の防止効果が高いので、発生の多いところでは6月下旬の基準薬剤に必ず加用する。

トップジンMオイルペーストを使用して再発した場合は、削り取って他の塗布剤を塗るか、泥巻きを行う。

### 【 モニリア病 】

実腐れは見つけ次第摘み取って処分する。

### 【 黒星病 】

散布量が不足したり散布にむらがあると発生が多くなるので、基準散布量を守り丁寧に散布する。

6月下旬に発生が懸念される場合は、この時期の基準薬剤の中からプラウ水和剤又はユニックスZ水和剤を選択する。

### 【 斑点落葉病 】

随時不要な発育枝を剪去して病原菌の伝染源をなくする。

散布量が不足したり散布にむらがあると発生が多くなるので、散布間隔が開きすぎないようにし、基準散布量を守り丁寧に散布する。

### 【 ハマキムシ類 】

ミダレカクモンハマキ：落花10日後頃に発生が多い場合は直ちにダースバン水和剤、トクチオン水和剤、エルサン水和剤のいずれかを特別散布する。この場合、落花15日後頃のコナカイガラムシ防除剤は省略できる。

リンゴコカクモンハマキ：発生が多い所では、6月下旬～7月上旬頃に防除剤（トクチオン水和剤は除く）を加用する。

フェロモントラップによる成虫誘引消長から第1世代幼虫の防除時期を推定し防除剤を散布する。

ピレスロイド剤を使用した場合は、キンモンホソガ、モモシンクイガなどと同時防除ができ、次の殺虫剤を省略できる。

### 【 キンモンホソガ 】

発生の多いところでは、6月下旬頃に硫酸ニコチン液剤、デミリン水和剤、アドマイヤー水和剤、モスピラン水溶剤、ピレスロイド剤のいずれかを基準薬剤に加用する。

ピレスロイド剤を使用した場合は、ハマキムシ、モモシンクイガなどと同時防除ができ、次の殺虫剤を省略できる。

### 【 クワコナカイガラムシ 】

落花15日後頃に防除剤を散布する。ただし発生の多い樹は落花10日後頃と落花20日後頃に防除剤で胴木洗いを手散布で行う。

バンド巻きによる誘殺や捕殺などで密度の低下を図る。バンド巻きは越冬世代成虫の産卵前（6月下旬）に巻きつけ、第1世代卵のふ化前（7月中旬）に必ず除去する。

6月下旬から7月中旬まで成虫が大枝の切り口や木の空洞部周辺に集まるのでブラシなどでつぶす。

## 【 ハダニ類 】

根バヤと大枝から発出している徒長枝は早めに剪去する。

6月下旬以降、常時発生状況を観察し、発生を確認してから殺ダニ剤を散布する。ただし、同一薬剤の連続使用を避け、年1回の使用にとどめる。また、コロマイト乳剤は6月末まで使用しない。

## 3 りんご以外の落葉果樹

病 害 虫 名	予 察 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
(ぶどう) 灰色かび病	県内全域	平年並	平 年 並	6月の降水量が多い見込みである。 前年の発生量が少なかった。
(西洋なし (フルミッシュ・ビューティー) 黒星病	南部地域	-	平 年 並	6月の降水量が多い見込みである。 5月の発生量が少なかった。
(おうとう) 灰星病 <実腐れ>	県内全域	平年並	多 い	花腐れの発生量が平年より多かった。 6月の気温は高く降水量は多い見込みである。 樹の生態が平年並に経過している。

## (1) 防除のポイント

### ぶどう

## 【 灰色かび病 】

新梢の摘心や誘引を適切に行い園地内の通風をよくする。ハウス栽培では室内の換気に努め過湿にならないように注意する。

発病した葉、花穂、花はできるだけ早く取り除き、土中に深く埋める。

開花10日前（6月上旬頃）にオーソサイド水和剤80を散布する。

開花直前（6月中旬頃）にオーソサイド水和剤80又はゲッター水和剤又はフルピカフロアブルを散布する。

落花直後（6月下旬頃）にロブラール水和剤又はロブラール500アクア又はゲッター水和剤またはポリベリン水和剤を散布する。

開花10日前（6月上旬頃）散布後、不順天候で多発が懸念される場合は、前回散布1週間後にオーソサイド水和剤または、本病の同時防除ができるアリエッティC水和剤を特別散布し、開花直前にゲッター水和剤又はフルピカフロアブルを選択する。

### な し

## 【 黒星病 】

落花20日後（6月上旬頃）に有機銅剤又はキャプタン剤又はキャプタン・有機銅剤を散布する。

なお、多発が懸念される場合はトップジンM水和剤又はベンレート水和剤を加用する。

落花30日後（6月中旬頃）に有機銅剤又はビスダイセン水和剤又はサニパー水和剤又はキャプタン・有機銅剤を散布する。なお、ビスダイセン水和剤は「八雲」に使用しない。

## 【 輪紋病 】

西洋なしは特に発生が多いので、落花20日後（6月上旬頃）から次の有機殺菌剤を10日おきに散布する。ただし、同じタイプの薬剤の連用はなるべく避ける。

Aタイプ：キャプタン・有機銅剤、キノンドーフロアブル、キャブレート水和剤

Bタイプ：ベフキノン水和剤、ベルクート水和剤

Cタイプ：ストロビードライフフロアブル

Dタイプ：デランフロアブル

キャプタン・有機銅剤はダズバン水和剤との混用で薬害のおそれがある。

ベルクート水和剤は「ル・レクチュ」にさび果を生ずるので使用しない。

ストロビードライフフロアブルはおうとうに被害がでるのでかからないようにする。

ストロビードライフフロアブル及びキャブレート水和剤は日本なしに使用する場合は落花30日頃（6月下旬頃）から使用する。

おうとう

【 灰星病 】

落花 3 週間後にオーソサイド水和剤を散布する。落花30日後にバイコラル水和剤又はアンピルフロアブルを散布する。収穫前にロブラールフロアブルを散布する。なお、バイコラル水和剤はぶどうに薬害がでるので注意する。

成熟期間中に降雨の続く場合や、花腐れの発生の多かった園地では、収穫 7 日前頃にラリー水和剤又はルビゲン水和剤を特別散布する。

## 4 畑作・野菜

病 害 虫 名	予 察 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
(小 麦) 赤かび病	県内全域	-	やや多い	出穂期が平年より遅れる見込みである。 6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。
(小 麦) うどんこ病	県内全域	-	やや少ない	5月中旬の発生量が平年より少ない。 6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。
(小 麦) 赤さび病	津軽地域	-	やや多い	5月中旬の発生量が平年よりやや多い。 6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。
	南部地域	-	平 年 並	5月中旬の発生は、認められていない。 6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。
(じゃがいも) 疫病	県内全域	やや早い	平 年 並	6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。
(アブラナ科野菜) ヨトウガ	県内全域	やや遅い	平 年 並	4～5月の気温が平年並～低く経過した。 前年の第2世代幼虫の発生量が平年並で、越冬量が平年並と考えられる。 6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。
(アブラナ科野菜) コナガ	県内全域	-	やや少ない	5月の成虫飛来量が平年より少なかった。 6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。
(にんにく) 春腐病	県内全域	-	やや多い	5月中旬の発生量が平年よりやや多かった。 6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。
(にんにく) さび病	津軽地域	-	やや多い	一部発生の多いほ場が見られた。 6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。
	南部地域	-	平 年 並	5月中旬の発生量は平年並であった。 6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。
(にんにく) 葉枯病	県内全域	-	平 年 並	5月中旬の発生は、平年同様確認されていない。 6月の気温は高く、降水量は多い見込みである。

## (1) 防除のポイント

### 小麦

#### 【赤かび病、うどんこ病、赤さび病】

赤かび病の発生がやや多くなると予想されるので、出穂期の防除は必ず実施する。

開花期～乳熟期にかけて降雨や濃霧が続くような場合には、出穂期散布の7～10日後に追加防除を行う。特に、赤かび病の発生源となる紅色雪腐病の発生が見られたほ場では注意する。

うどんこ病、赤さび病の防除は発生初期と7～10日後の2回位、下葉にも十分付着するように散布する。

### じゃがいも

#### 【疫病】

平均気温15℃以上で雨が2～3日続くと発生し始め、20℃前後で曇天多湿な天候が続く場合に蔓延する。

着雷期～開花期頃から、7～10日間隔で定期的に防除を実施する。特に、曇雨天の日が続くような場合には、散布間隔が開かないよう降雨の合間をぬって薬剤散布を行う。

発生が認められた場合には、5～7日以内の散布間隔で防除を行い、蔓延を防止する。

#### 【オオニジュウヤホシテントウ、アブラムシ類】

いずれの害虫も春からの天気がよい年ほど発生が多くなる傾向がある。

アブラムシ類は、じゃがいもの生育初期にウイルス病を伝搬することがあるので、発生初期からの防除が大切である。

### にんにく

#### 【春腐病】

県南地域を中心に発生が多くなっているため、下記の事項を参考に防除を徹底する。

本病は降雨や濃霧が続く場合に急増する特徴があり、多肥栽培及び排水不良田で多発する傾向がある。

発病株の発見に努め、伝染源となる腐敗株は抜き取る。

発生の多いほ場では、7日おきを目安に抗生物質及びその混合剤を散布する。

天気予報により3～4日降雨が続く場合には、降雨前に薬剤を予防散布し、天候の回復後、直ちに再散布して蔓延を防止する。

《春腐病の登録薬剤一覧表》

薬剤名	倍数	使用時期	使用回数	備考
ICボルドー66D銅水和剤	50	-	-	銅剤
Zボルドー	500	-	-	銅剤
コサイドボルドー	1,000	-	-	銅剤
カスミンボルドー	1,000	収穫7日前まで	}併せて 5回以内	銅・抗生物質混合剤
カッパーシン水和剤	1,000	収穫7日前まで		銅・抗生物質混合剤
バリダシン液剤5	800	収穫7日前まで		抗生物質混合剤
アグリマイシン-100	1,000	収穫7日前まで		抗生物質混合剤

注) 1. 散布量は、10a当たり250～300gとする。展着剤は湿展性の良いものを使う。

2. コサイドボルドーは、薬害回避のため必ずクレフノン200倍で加用する。

3. カスミンボルドー、カッパーシン水和剤、アグリマイシン-100は、日中の晴天時や生育初期に散布すると葉先枯等の薬害を生じることがある。

#### 【さび病】

津軽地域では発生が多くなっている。

本病は、気温が20℃前後と高めに推移すると夏胞子の飛散量が増加し、蔓延しやすくなる。

発病初期(下表の注を参照)が5月上～中旬となるようなほ場では、多発する傾向があるので注意する。

6月に入ると大部分のほ場が蔓延期に到達しているので、下記に示した防除薬剤の蔓延期における効果持続期間(散布間隔)を参考に、防除を実施する。

多発生が予想される場合には、散布間隔を短くする。

《各種ニンニクさび病防除薬剤の蔓延期における効果持続期間》

薬 剤 名	効果持続期間
アミスター20フロアブル	21日程度
ラリー乳剤	10～14日程度
ストロビーフロアブル	10日程度
バイレトン乳剤	7～10日程度
バイレトン水和剤5	7日程度

【 葉枯病 】

生育の後期に雨が多いと発生が多くなる。

早期発見に努め、発生初期から10日おき位に薬剤を散布する。

アブラナ科野菜

【 ヨトウガ、コナガ 】

生育初期に発生すると被害が大きいのので、定植時の薬剤防除を徹底する。

ヨトウガ及びコナガとも、老齢幼虫になると薬剤効果が劣るので、若齢幼虫の内に防除する。

同時に発生するモンシロチョウ、ウバ類との同時防除を考慮して効率的な防除を行う。

コナガは殺虫剤に対する抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。

6月の病害虫テレホン情報案内

(津 軽 地 域)      電 話   0 1 7 2 ( 5 3 ) 0 0 3 3

月	旬	水 稻	果 樹	畑作・野菜
6	上	イネミズゾウムシの防除	黒星病とコナカイガラムシの防除	にんにくの病害虫防除
	中	本田初期害虫の防除	黒星病と斑点落葉病の防除	
	下	イネカラバエの防除	斑点落葉病、ハマキムシ、キンモンホソガの防除	じゃがいもの疫病の防除

(南 部 地 域)      電 話   0 1 7 6 ( 2 4 ) 0 0 8 8

月	旬	水 稻	果 樹	畑作・野菜
6	上	6月病害虫発生予報について	6月病害虫発生予報について	6月病害虫発生予報について
	中	本田初期害虫の発生状況と防除	りんごの6月下旬の防除とぶどうの灰色かび病の防除	キャベツのコナガの発生状況と防除
	下	イネドロオイムシの発生状況と防除と葉いもちの防除	りんごの7月上旬の防除	じゃがいもの疫病の防除

なお、テレホン情報は、病害虫の発生状況により変更することがあります。